



<2ページからの続き>

全ての教会が同じ課題を持っているのであれば、自分の教会の事として、継続的に共有、協力していく事も出来る。主の名によって2人、3人、19人集まる所はやはり違いました。
「教会がなくなる時代」から教会堂が溢れかえり、新たな教会を生み出す時代にしようと、ルカ24章の「エマオへの道」になぞらえられる、心が燃える旅、協力伝道の希望を見いだすことのできるプログラムでした。

<事務局よりお知らせ>

全国壮年会連合HomePageをリニューアルしました

HPのヘッドラインの内、「ホーム」は3つの神学校と神学生の近況、「ドキュメント」には全国壮年会の活動と情報を掲載。「お問い合わせ」には、質問・要望・最新のニュース記事が書き込めます。

この機能を使って2014年度神学校週間活動など皆様の情報を分かち合ひましょう。

FaceBookも利用できますので、交流と親睦を深めて協力伝道を支え合ひましょう。

URL、mailはwww.sonen.netとsonen@bapren.jpに変更はありません。問い合わせは事務局 飯野 實まで

2014年度 全国壮年会連合総会 議案審議結果【報告】

議案 (審議詳細は10月発行の大会報告書を参照ください)		審議結果
議案 1	2013年度全国壮年会連合活動報告の件	承認
議案 2	2013年度全国壮年会連合奨学金委員会活動報告の件	承認
議案 3	2013年度全国壮年会連合会計(一般会計、奨学金会計)決算報告、監査報告の件	承認
議案 4	2015年度神学校献金(神学生奨学金献金)目標額の件	承認
議案 5	2014-2015年度全国壮年会連合活動計画案の件	承認
議案 6	2014-2015年度全国壮年会連合奨学金委員会活動計画案の件	承認
議案 7	2014年度全国壮年会連合一般会計修正予算案及び2015年度全国壮年会連合一般会計修正予算案の件	承認
議案 8	2014年度全国壮年会連合奨学金会計修正予算案及び2015年度全国壮年会連合奨学金会計修正予算案の件	承認
議案 9	2015-2016年度全国壮年会連合奨学金委員長選挙に関する件	承認
議案10	規則改定委員の件	承認
議案12	2016年度全国壮年大会開催担当地方連合の件	承認
議案11	2015年度総会議長の件	承認

会議報告

◇ 第2回役員会

開催日: 9月13日(土) (於連盟会議室) 出席者: 壮年会連合役員・監査、事務局員、他

<審議内容>

- 8月の全国大会・総会の総括を行い、特に2014-2015年度活動計画に掲げた諸項目について役割、方法等を確認した。
- 大会報告書の役員会側所掌の項目について、担当と内容を確認した。
- 来年度の全国壮年大会実行委員会(東京連合)への要望事項を確認し、野口副会長より東京大会実行委員会へ伝達していただくことにした。
- 壮年のネットワーク構築の一環として、壮年会連合HPのリニューアルを準備しているが、そのコンテンツについて確認した。
- 原田潔・規則改定委員長より進捗状況を報告いただいた。来年3月を目標に取り纏め、代表者会議や役員会での協議を経て総会へ提案する。

日本バプテスト連盟全国壮年会連合

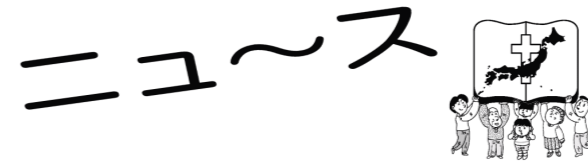
〒336-0017 さいたま市南区南浦和1-2-4

事務局執務時間: 月、水、金 10:00 ~ 16:00

☎・fax: 048-886-7533 http://www.sonen.net sonen@bapren.jp

郵便振替 00150-7-669605 「日本バプテスト連盟 全国壮年会連合事務局」

全国壮年会連合



2014年10月31日

No.83

日本バプテスト連盟全国壮年会連合

発行人 大城戸一彦

編集人 井伊 肇

Topics password → sorengo

協力伝道にこそ壮年の力を

日本バプテスト連盟宣教部長 野口哲哉



神学校に行く前のことでした。水曜日の夜の祈禱会で、毎週顔を合わせる壮年のU兄がおられました。私はいつも誠実に教会生活を重ねておられる姿に頭が下がる思いで祈りを合わせていました。二人で祈るときU兄が必ず祈られたことは、神学校で学び、牧師として献身する方々をおぼえての祈り

でした。「健康が守られ、良き備えの時となりますように・・・」。神学校に行き学んでいる人々をあたかも目の前にしているかのような熱心な祈りを聞きながら、静かな感動を与えられたことを思い出します。こういう方々の日常のたゆまない祈りによって支えられ、送り出されているのだということが、神学校時代の私を支えることとなりました。そして現在、牧師として献身した者である自分の根底には、そうした壮年はじめ教会の兄弟姉妹の祈りがあることを知らされています。

今、宣教部の働きを担う中で感じているのは、私たち連盟の各教会は、次の時代にどのように生命をつないでいくかということがテーマになっているということです。ここ数年、いくつかの教会の解散や消滅ということが連盟の中で起こりました。会衆主義であるバプテスト教会ゆえに、自分たちの最後の決定として「活動終了」や「解散」もあり得るでしょう。しかし、イエスさまの福音に出会う機会が少なくなっている多くの人々を前にして、教会が減少していくことに、残念な思いを持つ人も少なくないでしょう。

そこで、連盟の各教会が次の時代にどのように生命をつなぐかということテーマに、教会を担う信徒の働きとして、一人ひとりがどのように聖書が示す御言葉に生かされ、生命をつなぐ主の業に参与していくのかを、考えてみたいと思われたのでした。

1. 主イエス・キリストに新しくされ、従う生活

壮年たちが、聖書が指し示す主イエス・キリストに従うことが、さらにいっそう深まっていくと、教会は確実に変わります。しかし、繰り返される礼拝や教会の行事に慣れ、新しさを感じない教会生活になってしまうと、教会も信仰生活も、自分を保つための手すりになってしまいます。聖書を通して語りかけられる主イエスの御言葉は常に新しく、若い皮袋を必要としています。主の御前に常に変革される「人」としての自分を捧げることができるかどうか、振り返ってみるのはいかがでしょうか。主の御言葉が、いつもその人の中で喜びとなり、教会への祝福となる有様をご一緒に経験していきたいと思っています。

2. 証しの生活

教会生活が、いつしか教会の内側だけの人間関係になってしまっているということはないでしょうか。歳を重ねると、医療や福祉のお世話になることは避けて通ることができませんし、社会の様々な人々との関係の中で、私たちは生かされている存在です。教会以外に出会いや人間関係も大切にしながら、そこでなし得る証しはないでしょうか。聖書やキリスト教を題材にした一般向けの書籍が書店に並ぶ時代です。なんとなく関心を持っている人は多くいます。私たちキリスト者一人ひとりには、そういう人々に対する窓口になる責任、すなわち主を証しする働きが与えられている、そのことを考えておく必要があるように思います。主から地上での「引退」を告げられる召天の時まで、主に用いられ、働きたいものです。

さてその上で、連盟の「協力伝道」に共に汗を流していただくことを、今以上にさらに力強くお願いしたいと思います。

今年度から女性連合主催の「6.23沖縄平和学習ツアー」と、連盟宣教部主催の「国内ミッションスタディツアー」への参加をお願いしたところ、さっそく壮年からの参加者が与えられ、終了後、とても感性豊かな報告や感想を寄せてくださいました。宣教課題に出会う旅や、教会形成や協力伝道に仕える旅は、今までどちらかという女性会や少年少女たちが主体でしたが、壮年の間にもたくさん祈りや思いが積み上げられていることを感じました。私たちバプテスト教会に集う人々には、人や課題と出会う力、与えられた事柄を言葉にして具体的な働きにしていく力が、主によって蓄えられていることを教えられています。冒頭のU兄による日常のたゆまない祈りは、今もたしかにバプテスト教会を支え、壮年たちに受け継がれていることを感じています。

であるがゆえに、私たちの協力やネットワークで克服できる各教会の課題も多くあるのではないかと手応えを感じています。旅に参加した壮年たちが、教会を動かす、各教会が取り組む協力伝道の要(かなめ)になっていく時に、連盟の協力伝道の質的変化が起こされるのではないかと考えています。その意味で、連盟宣教部の施策は道具(ツール)であって良いと思います。壮年と連盟宣教部とのまさしく「協働」によって、協力伝道が作り上げられていくことを期待し、願っています。

<神学生の証>

多摩川キリスト教会牧師 末盛桜子



主の聖なる御名を賛美いたします。

全国壮年会連合の皆様、神学校への尊い祈りと献金を心より感謝いたします。私は、2010年に

東京バプテスト神学校本科に入学し、今年から専攻科一年生となり学びを続けています。まさか自分が神学校へ通うことになるなど想像もしておりませんでしたので、入学当初は難しい神学の学びについて行けるのか大変不安でした。「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう。」(ルカ5:5)と、お言葉に従ったペトロの網を破れるほどに満たして下さった主は、貧しき器を満たし、私の思いを遥かに超える恵みで今日までお導き下さいました。主の深い憐みと、背後で絶えず祈り支えて下さる教会の祈りを勿体なく感謝いたします。そして、そのように多くの尊い祈りが積み、この度、多摩川キリスト教会の牧師に就任いたしました。現在は、神学生として、牧師として、主より与えられた任務に励んでおります。先ほどルカによる福音書の御言葉を引用しましたが、私の献身の始まりは正に「夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。」

この告白から始まり、今日もこの現実に立たされております。「心を込めて主を愛したい、主に仕えたい、そして主に従って行きたい。」けれど、現実には、一歩進むたびに自分の不信仰、不従順、愛の無さを見せられ主に捧げるものは罪しかないことを知ります。涙を流し悔い改める日々です。しかし、どのような時であっても、どれほどこちらが弱く足りなくても語られる御言葉に固着し、主にのみ依り頼んで行くとき、主はこの空の器を聖霊の油で満たし、時に適って助けを与えて下さいます。そのような中で、主の十字架は今日も輝き、私を贖い御国へと導いて下さっていることを確信いたします。

専攻科では、説教演習を受講しました。課題の聖書箇所が出され、それぞれの担当箇所をギリシャ語、異なる翻訳、そして様々な註解書を読みレポートにまとめ、そこからどのように説教をするか皆で考えます。改めて原語で読むことの意義を知り、御言葉の深さを味わうことが出来ました。神学校での実践的な学びは、そのまま教会の働きの助けとなるので大変感謝しています。

これからも、神学校が生徒の数においても学びの質においても、豊かに祝福されてまいりますように。また、皆様の教会・伝道所から続々と主の僕たちが産み出されて行きますように、引き続き皆様のお祈りを心よりお願いいたします。

<国内ミッションスタディツアー参加報告>

「五島にあったのは、

全ての教会と同じ希望と課題」

内藤 崇(目白ヶ丘教会)

2014年9月、連盟が主催した国内MST(国内ミッションスタディツアー)で、長崎県五島市の「富江」(富江教会)と「福江」(福江伝道所)へ行く前、わたしのイメージは寂れた漁村の、火が消えたような教会というものでした。それはこの10年の間、礼拝出席5人、計上献金100万円という数字から見えてくるものでもありません。

100年の長い役割を終えて、閉鎖ないし統合も検討すべき存在なのか、それを確かめたいと思い、キリシタンの歴史、世界遺産申請でも注目されるきれいな教会を見たいと言う思いも手伝ってわたしは参加させていただきました。

この国内MSTのプログラムは連盟にとって初めての試みです。

連盟の歴史も「教会がなくなる時代」となり、協力伝道その直接的な協力関係醸成には現地へ行く事からとの呼びかけに、全国からメンバー12人、リーダー3人、ホスト4人の計19人が集まりました。

プログラムは事前学習に始まり、現地では明石初恵先生、前田文生先生から「富江」「福江」の歩みを共有していただき、繋がりがある教会近隣の方々との語らいを通すことで、地域の事情を知る機会をいただきました。そしてそこにあったのは、希望が見えない寂れた漁村の火が消えたような教会ではなく、地域に100年の確かな足跡を残し、希望の火がしっかり灯った、地域の教会でした。

人口が減っているとはいえ、4万人の市民が居て、教会の立地は小学校・保育園・高齢者住宅の目の前であり、教会堂も牧師館もきれいに保たれています。

「富江」「福江」では地域の方が教会へ足を運んでくれるよう、キリスト教にまつわるDVD上映会、地域の音楽家による音楽会、ネパールをテーマにした集い、子ども集会、高齢宅へのお弁当配食など、多様な取り組みを誠実になされていましたが、求道、礼拝出席には繋がっていません。課題を話し合う中で見えてきたのは、中学生の部活、単身者の増加や、間口を拡げるプログラムが多様になりすぎていて、そこに時間を取られすぎているといったことです。そしてこれは全ての教会が共通して持っている事ではないかと言う気がありました。 <→ 4ページに続きます>

シリーズ「献身者を起こす教会・伝道所、献身者を育む信徒運動」

その3「専」

日本バプテスト連盟常務理事 吉高 叶



昨年の壮年大会で、私は「献身者のたたずまい」を四つの文字に託して語らせていただきました。すなわち「断」「受」「専」「委」という四文字です。今年度、この一文字ずつに象徴されている(と私が感じている)献身の姿について「壮年連合ニュース」で連載してくださっています。今回は、そのシリーズの三回目で「専」です。

シリーズの1で、私は、人が献身して神学校に行くその道筋において、それまでの自分の計画や願望を「断念」し、また自分の身につけてきた経験値や功績などを「断ち切って」学びの場に臨んで欲しいということを書きました。シリーズの2では、その学びの場と機会とを、諸教会・伝道所の祈りによって自分に贈られた恵みとして「受け」、ぜひ奨学金を受け取って学んでいただきたい、と書かせていただきました。

そして今回、献身者にとって神学校時代とは「『専念』の時である」と申し上げたいのです。「専」という文字は、訓読みで「もっぱら」。まさしく、その一事にひたすら全てを傾けることにあります。古代中国では、官吏が常にその腰帯に差し込んでおき、何事も書き取っていくための木製の手帳(紙が無いほど古代の話?)のことを「専」と呼んだそうです。そして「専念」の「念」は、その文字のつくりにあるように「今の心」です。今の心を専らそれに集中させていく時、神学生時代はそれが許されているとても貴重な時間なのです。

では、それとは何のことでしょうか?

もちろん、神学校時代ですから「神学を学ぶこと」です。誰もが神学校に入学すると、学ばねばならない科目が多岐に亘るのに驚きます。聖書の原典原語、聖書学(旧約・新約)、歴史神学(教会史や教理史など)、教義学、教会教育学などの神学諸科目を一通り学んでいかねばなりません。また、それらを「教会に仕える学び」として統合するための実践神学の学びが不可欠です。たとえば、聖書釈義という科目は、固定した聖書解釈を学ぶためのものではありません。テキストの持つ本来の意図をくみ取りながら、コンテキスト(生の状況)との対話を通して、ケリギユマ(宣教の指針)を掴み取っていく作業です。「今日の教会が聴くべきことは何か」「いま、命が解放されるために何を宣言すべきか」というまなざしや感性を注いでなされるべきです。すべての科目は、そのように実践神学の助けによって「教会で生きる」ものになるわけです。どうしても、神学校で学びながら同時に教会にしっかりとコミットし、

教会現場を丁寧に観察しながらなされる学びなのです。そして何より大切なのは、それら神学の営みを通して、神学生は「神学的思考」を獲得しなければならないということです。

神学的思考とは、一つの出来事(実際の事件)を検証し、客観化し、普遍化して神学的な経験とすることです。教会で起こる様々な出来事を、(うまく解決できる・できない、とは別に)常に神学的に捉え、つまり聖書の言葉から再解釈し、教会の事柄とするために理解し位置づけ直そうとする、そのような思考力のことです。神学を学ぶ上での最も大切なことは、必ずしも「神学的知識」をたくさん蓄えることではなく「神学的思考」を体得することだと、私は思います。それは、やがて着任した教会と自分自身とに引き起こされる出来事を冷静に吟味する作業へと牧師を導いてくれます。感情的な対処・その場凌ぎ的な対処から、教会形成担当者としての対応へと牧師を育ててくれるのです。牧会現場での失敗(これは避けられない事です)を通して、次の局面への経験とさせてくれる力でもあります。ですから、伝道者の教育機関である神学校は、学生が実践神学的な統合力を身につけているかどうか、また神学的思考力が醸成されているかどうか、十分に気を配っていただきたいと願います。

「専・もっぱら」と言うと、どうも机にかじりつき、神学書を手から離さないような姿を連想されたかも知れません。もちろん、机にじっくり座って丹念に学び、深く黙想をする時間をおろそかにして欲しくありません。けれども、教会生活と奉仕を一生懸命に果たし、また機会があるならば、人間の命が抜き差しならないかたちで噴出している「現場」での活動に出会ったり、参加したりすることも神学生時代の学びにとって大切な事です。ただし、その学びと出会いの全てを、「福音宣教」と「教会形成」のもとに位置づけて考察し、自らの牧師・伝道者としての生き方を模索する。そんな学びと訓練の時代として、それに専念していただきたいのです。